紀下196 12行

日向の駒

■推古二十年（六一二）正月七日、推古天皇は、群卿を大倭国（九州）の小墾田宮に召して、酒宴を催された。

■是の日、蘇我馬子大臣は、壽上りやすみしし我が大君の隠ります天の八十蔭出で立たす御空を見れば萬代に斯くしもがも千代にも斯くしもがも畏みて仕へ奉らむ拝みて仕へまつらむ歌献きまつる

（わが大君がお入りになってお休みになる御殿を出で立たれる御殿を見ると、まことに立派である。千代、万代までこのようであって欲しい。そうすれば私は（現代風の表現をすれば）子孫達は、畏み拝みつつお仕えいたしましょう。ささしんでおよう

こびの御歌をたてまつります）

とこのことほぎの歌をたてまつった。

天の八十蔭は、天日（太陽）の日蔭になる広大な場所つまり宮殿の意であって、そこを出てお立ちになる

『ヤスミシシ』は『我が大君にかかる枕詞』

『蘇米盧』を見せる　チェックOK　26字行

紀下196 注15
井上142

4,005

紀下196 注15「天の八十蔭」

コクヨ　ケ-20　20×20

ちのいらつめ
乳娘 (南) 4395P　紀下196 注16　4,006P　記(上)31P　紀下198P　亀井203P

御姿を前に、天皇の万歳を寿ぎ、忠誠の永遠を誓って盃をささげる歌である。意は簡潔でしかも大らかで、明朗な風趣が漂っている。

「聖使太子」亀井勝一郎、日本ソノサ[redacted]

「日本書紀」(日本古典文学大系)岩波書店「九六頁第一五

ービスセンター、二〇三頁参照

推古天皇は、たいそうお悦びになり、これに和えて、

蘇我の子らは馬ならば日向の建日向つまり後代の肥国の駒太刀ならば呉の真刀諸しかも蘇我の子らを大君の使はすらしき

蘇我の氏の人よ。あなたがたは、馬にたとえるなら、現在のこの建日向の国の立派な馬、太刀にたとえるなら、はるか昔の我が祖先の地。呉の国のすばらしい真刀です。駿馬も真刀も、大君が持ってこそ、ふさわしいといえましょう。代々の大君が蘇我の人々をお使いになるのも、まことにもっともなことであります。

と、お歌いになった。

＊

聖寿無窮

コクヨ　ケ-20　20×20

広辞183ページ　宇治川の戦い 広183ページ　梶原景季 408ページ　佐々木高綱 881ページ　熊本の伝説 91ページ　4007ページ　記(上)31ページ　紀下197ページ注16　ぜんてい 前提 1271ページ　「ところで」 3982ページ　みうた 御歌 4005ページ

＊詠み

■ところで、推古天皇がお歌いになった後者（蘇我の血筋を引く者達）御歌は、

〈日向の駒は優秀である〉

ということを前提として、蘇我の子等を「日向の駒」にたとえ、誉め称えたものである。

■しかし、日向（宮崎県）の駒が優れていたという資料は、現在のところ見当らないという。（「日本書紀」(下)日本古典文学大系、岩波書店、一九七頁注一六参照）

■もしかしたら、ここにいう「日向」は、「建日向日豊久士比泥別」（肥の国）を意味しているのではなかろうか。（「記」国生み参照）

■なお、宇土半島基部北岸の網津・住吉を中心とする一帯は、「百町の牧」といわれ、旧藩時代に至るまで良馬を産する牧場として知られていた所である。

■また、平安時代末の一一八四年、源氏の二将梶原景季と佐々木高綱が「宇治川の先陣」を競ったことで有名な摺墨・池月の争いに出

720

高綱の愛馬「池月」（＝生唼）は、――――
この宇土牧「百町の牧」の産馬である、と伝
えられている。（「熊本の伝説」荒木精之、
角川書店、九〇～九一頁参照）
■なるほど定かでないが、
①推古朝以前から、――――
へ至るまで、宇土半島基部あたりは良馬を
産する牧場として知られていたのかも知れな
い。
②また「日向の駒」というのは、「建日向
日豊久士比泥別（肥の国）の駒」のことを指
していたのではなかろうか
と想像される。
■尚、住吉を流れる川「網津川」に沿って南
の山中へ二㌔ほど入った所、「馬門部落」に
は、牛馬の神を祭っている「牧神社」がある
という。（「熊本の伝説」荒木精之、角川書
店、九〇頁参照）

4009P

・左右は、適宜カットして下さい。

・カラー頁の上部に限り、赤枠内に掲載下さい。

↳ 鳥居がピンク色に見えるように注意して下さいます。少々薄いめにお願い

1429 写真図版 678 馬門の牧神社鳥居 1807（文化4）年奉建 ← 右側の柱に、「奉建」とある

1429 (第273図<住吉周辺地図>参照)

1399

新宇土市史 第二巻 宇土市 平成14年3月29日発行 口絵 359頁参照

・牧神社の鳥居は、馬門石（ピンク凝灰岩）で造られている。 722P

H5.4.1(月) 紀下198ｐ注5 紀下198ｐ注3 (4,010ｐ～4,013 欠番) 井上143ｐ 紀下199ｐ 置き去り 288ｐ 紀下198ｐ注32
H9.1.5(日) 4,014ｐ

須弥山（蓬莱山）を南庭に築く

推古二十年（六一二）是歳。百済から帰化しようとしている男がいた。其の顔や、身体中に一面、白い斑点だらけがあった。白癩でもあったのだろう。

人々はその異様なさまを嫌い、海中の島へ置き去りにしようとした。

「私の斑皮がいやだというのなら、国内で白斑の牛や馬を飼うこともできないはずだ。それに私は人にはできないわざをもっている。それは築山をつくることだ。私を留めて用いるならば、国の為になるぞ。海の島に棄てるなんてもったいない」と言った。

それを聞いて、置き去りにするのをやめ、須弥山（蓬莱山）仏説で世界の中心をなす山のかたちと、呉橋（呉国風の石橋か）とを、御所の南庭に築かせた、という。（紀）

なお、先述べたように、

① 紫宸殿を、南殿。南大殿。前殿

② 紫宸殿前の広大な庭を、南庭

タイトル 3968

3971 P −2/2 3970 P −4/5 1823 P こと 4,015 P

1370 P −4/5 大カロンフ274 北是漢ホク 3970 P −2/2 3971 P −2/2

(1823 P) 1370 P −4/5 に同文 1373 こと

元下190 P まる3件 1370 P −3/5 3970 P −2/2 図 3971 P −2/2

③ 朝庭（庭中）の正門を「南門」と称したという。（第七十四章〈小墾田宮の構想について〉の項において既述）

・とすれば、言外に、宮城内には、〈その昔、「北殿」や「北庭」や「北門」もあった〉という天武政権ことを示唆しているように推察される。

・つまり、〈南宮の「南殿」（紫宸殿に相当する殿舎）の前の庭を、――古来、北庭に対し「南庭」と称していたのであろう〉と解される。

・さらに、〈須弥山の形及び呉橋を作った「南庭」とは、――南宮の内裏の前の広大な庭のことなのであろう〉「南殿（紫宸殿）」と思われる。（第十八章〈南殿および南庭〉、第二十七章〈倭国の宮城・穴・巣〉の項において既述）第七十四章〈小墾田宮の構想について〉の項参照）

＊

タイトル 3968

15.4.26 ⓟ ⓒ
みあたらない 417.5.10 ⓟ
5file 4015 p 日本史年 889 p
4016 p
はうりんきゅう 松林宮
新聞切抜き ブルー 末20 p
後庭 イ林 3755 p 大カンク 793 p
絶上520 p
前項3行 とすべきで

■それでは「北宮」は一体どのような用途の為に築かれたのだろうか。

・その詳細については分らない。

■しかし、顕宗紀元年三月条に

「後苑に幸して、曲水の宴きこしめす」

と記されている。

■北宮内の庭園いわゆる「後庭」（背後にある庭園、奥庭）の〇〇を、「後苑」とも称したのでは なかろうか。

■そして、この後苑等が平城宮の北側にみられる松林宮へと引き継がれていったのかも知れない。（第20図〈当初の平城京構想〉参照）

■天平時代に、饗宴の場としてしばしば利用された■松林宮の実態が、徐々に明らかにされつつある、という。（「日本史辞典」東京創元社〈平城京〉参照）

■また、長岡京の発掘調査の結果、都の北側に隣接する地点から、「後苑」（大規模な離宮）の跡とみられる池や建物の柱などの遺構が確認された、という。（「朝日新聞」平成八年五月十三日付〈長岡京に大規模な離宮〉参照）

新代(1)-p143 「小町」87 第16回
725
コクヨ ケ-20 20×20

隋の瓦解

■いまだ大陸の様子を見てみよう。

■隋煬帝は絶大な皇帝権を手中にしたがそれだけでは満足できず、周辺近傍の国々を己の前に屈伏させ、東西南北の諸国の使臣を朝貢せしめ、帝威を振り翳そうとした。

■南方の林邑（インドシナ半島南東部の占城）征伐や、流求（台湾）討伐、西の青海および新疆方面の攻略には、それぞれ相当の戦果をあげ、■多くの掠奪品等を得て兵達が凱旋してきた。

■甘粛西端の敦煌をこえ西方諸国へも隋の国威は伸張し■洛陽に■西域との貿易が盛んになった。（「世界の歴史」(4)唐とインド、中央公論社、三二六頁参照）

■尚、■前述の■友ように、推古十六年（大業四年、西暦六〇八年）九月十一日に再び大使として隋へ遣わされた小野妹子は、――――翌年の推古十七年（大業五年六〇九）九月には、はやくも隋を辞去して日本へ帰り着いていた。（第七十四章〈多吾花・衣服・冠〉の項末尾において既述）

紀下194

唐とインド326

大業6年

4,018

喝采 元430

誇示 前6 8行

帝権 なかつ 911 無し

3,879 2/24行

公私には限りが無いものであ

ただし、通事の福利のみ隋に留まった。（紀）

あるいは言葉に不自由しない福利だけが、来るべき正月の盛儀に、諸国の使臣らに混って列席することにしたのかも知れない。

年が改まって、大業六年（六一〇）の正月を迎えた。

隋煬帝は、群臣をはじめ、諸外国の使臣、諸蕃の酋長などをことごとく洛陽に集めた。宮城正門前の大路には百戯の舞台が作られていて、やんやの喝采を博する種々さまざまな奇伎異芸がつぎつぎと演じられた。

楽器をとるもの一万八千人。その楽音が数十里に聞え、夜通しの燈光が天空にはえた。

盛儀は一ヶ月にもわたって続けられ、諸国の使臣、諸蕃の君長たちを敬嘆させた。

この時、まさしく帝王煬帝は得意の絶頂にあった。

しかし、煬帝の欲望に限界は無かった。

豪遊好きで独善、天下皇帝を振り自慢した煬帝は、――いま、何としてでも、一気に隋の国威を内外に誇示できるような大がかりな戦争をしたかった。（「世界の歴史

(4) 唐とインド、中央公論社、三二六～七頁参照）

727

紀下189P末

4.019P

「あの高句麗こそ、願ってもない手頃な相手よ。どうあろうとも父帝失敗の返礼をせねばならぬ。ましてや近隣の諸国からさえ悪逆無道な高句麗を計ってほしいと願い出てきているではないか」

思い込んだら一途な性分の煬帝は、はやる心を抑えて、鴻臚卿を呼び寄せた。

「例の件はどう進んでおるか。倭国は我国の威勢に恐れをなし、高句麗への挙兵を受諾したか」

「いま、そのように仕向ける為、最終的な詰めを行っているところでございます。どうかいま暫くの間、お待ち願いとう存じます」

「何だ、まだだと申すのか。よし、朕が決めさせてやろう、倭国から虐わされて来ている蘇因高（小野妹子）とかいう男をここに召すがよい」

「はい。いえ、その蘇因高はやーーー」

「何だと。蘇因高は帰国して通事（通訳）だけしかおらぬだと。たわけめ。えいえい。もう倭国か

大カンワ 1443 呉漢ブフ

大カンワ 611 呉漢テイ タイ

らの援軍など、あてもなしに待っておれぬわ
倭国の手を借りねば高句麗を討てぬというわけ
ない。朕は、朕のやり方で、高句麗を成敗し
てやる」

■隋煬帝は、これまでの戦いの経験からいって、食糧の輸送こそ勝利に直結する、と確信していた。（揚子江・太湖・杭州湾を結ぶ運河）

■そこで先ず、この年（六一〇）、何はさておき江南河と呼ばれる運河を開通させた。

■これは、現在の江蘇省鎮江から浙江省杭州へいたる大運河で、この完成により揚子江以南の食糧を運河づたいに涿郡（河北省）まで運べるようになった。（第461図〈隋代の略図〉参照）

■こうして翌大業七年（六一一）二月、高句麗征討のための総動員令が下され、天下は騒然となった。

■高句麗への進発基地には涿郡（現在の北京市）が指定され、全国から一三万八千の兵が集められた。兵士の徴発は三〇人に一人という割合であった。

■また、山東半島では三〇隻の船が急造され、河南・淮南・江南は兵車五万台の供

出の命をうけた。兵以外の軍役労務者の徴発は二三〇万という数にのぼった。

そして大業八年（六一二）正月、隋煬帝は高句麗親征軍は涿郡を出発した。

二十四個軍団と、それに倍する輸送部隊が①

じつに九百六十里（四百数十キロ）にわたる隊列を組み、行進曲を奏しながら、高句麗へ向かって進撃していった。

連隊ごとに鎧かぶとの色が異なり、旗なども色分けされていて、見ものとしては素晴らしかった。

しかし、この軍は、実戦において意外にもろかった。

隋煬帝は、

「軍隊すべて朕の命令下に行動せよ」

と命じたのだったが、――こんな大行軍に①

命令がそのつど徹底するものではない。

煬帝にいちいち指示を仰ぐ煩雑さが、軍の動きを著しく鈍くした。

同年四月にはすでに隋の大軍勢が遼東城

4,022字

古代朝鮮 188ページ
百科 ㉛-599ページ

花ひらく長安 216ページ
に詳しい。

水戦 小林。552

古代朝鮮 187ページ
遼東半島のつけね北

（遼東半島基部北側の遼陽付近）を包囲した

というのに、六月になってもまだ陥落させる

ことが出来ずにいたに

一方、隋の水軍は、山東省方面から黄海を

よこぎって、高句麗の首都平壌城を襲撃しよ

うとした。

平壌城から六〇里（約二七キロ）のところで水

戦が行われ、隋軍は破った人は高句麗軍に

快勝した。

ところが平壌城下で、隋軍は壊滅的な大敗

を喫し、土卒の還るものわずか数千人であっ

た。

山東半島

北

海上なので「地点」は変。

■さて、遼東城が膠着状態になっている時、隋の三十万五千の別動の陸軍が鴨緑江河口に集結した。

■ここに、高句麗の名将乙支文徳は、巧みな外交で隋軍内部を撹乱した。また、隋軍の食糧が少ないとみると、この別動隊を平壌から三十里（約十三キロ）のところまで引き入れた。

■さらに、高句麗は降伏した。だがそれは偽りの降伏であった。

■隋軍が騙されたと知って退くとこころを、高句麗軍は襲いかかり、猛攻撃した。

■当初は三十万五千いた隋軍が、なんと遼東城まで逃げ帰り得た者二千七百人という悲惨な結果におわった。（約百分の一の）（大勝利）

■朝鮮史上有名な「薩水（清川江）の大捷」といわれるのは、この時のことであり、高句麗軍が隋軍に痛撃を与えた壮絶な戦いであった。

■やむなく、同年七月、隋軍は撤兵した。

「古代朝鮮」井上秀雄、NHKブックス、一八二～一八九頁。「世界の歴史」(4)唐とインド、塚本善隆、三二六～三四

六頁。「大唐の繁栄」(7)世界文化社、九一～九三頁。「花ひらく長安」(4)集英社、二一六～二一七頁等参照）

＊

あんなにも華やかな

■あの軍容を誇った隋の大軍が、高句麗軍の戦略によって為すところなく次から次へ打ち破られてゆくのは、全く信じられぬ難いほどの凄まじさであり、劇的でさえあった。

■そうした戦況の詳細は、一一、東南大海中の聖徳太子のもとへ伝えられたことであろう。

■そして又、無惨な敗北を喫した隋煬帝の様子や、突然にも大きく揺らぎ始めた隋国の情勢などについても、詳しく述べるところとなったに相違ない。

＊

巧みな

紀下201ｐ　4.025ｐ　とう元1558ｐ　唐618年～907年　りえん元　李淵2309ｐ　煬帝の死　4157ｐ　元ここで隋帝～618年　花ひえ安226ｐ　4159ｐ　4156ｐ　えんせい元　遠征254ｐ　4021ｐ

あらかじめ、ここに述べておきたいことがあ

■この高句麗遠征の時（六一二）から六年後の推古二十六年（六一八）三月十一日に隋煬帝が殺され、同年五月二十日、隋煬帝の孫の恭帝から天子の位を譲られたという形式で帝位につき、唐朝が開かれることになる。李淵がいわば当然ながら隋が滅亡してやっと安堵したのではなかろうか。

■その年（六一八）の八月一日、高句麗は日本へ使者を遣わし方物（その地方に産する物）を貢り、次のように述べたという。（推古紀二十六年八月一日条参照）

「隋の煬帝は、三十万の軍を送って我が国を攻めましたが、しかし返ってわが軍のために破られました。それ故、捕虜の貞公・普通の二人と、鼓吹（軍隊の指揮に用いる楽器）・弩・抛石（石をはじきとばす武器）など十種類のもの、それに国の産物と駱駝一匹とを貢献します」

コクヨ　ケ－20　20×20

■高句麗の使者のこの口上は、察するところ多分、次のような意味なのであろう。

〈隋が三十万の軍を送って高句麗を攻めたとき、[redacted]の隋の大軍を高句麗軍が打ち破り得たのは、日本の陰の援助があったからです。それ故、捕虜二人と鼓吹・弩・抛石など十種類のもの、それに国の産物と駱駝一匹とを貢献します〉

■つまり、高句麗は、日本からの多大の助力に感謝して貢献したのであろうと想到される。

■なお、蛇足ながらあえて述べると、〈[redacted]が高句麗に対して全く何の支援もしなかったのであれば、――高句麗は「隋と戦って勝ったお礼に日本へ貢献する」などという行動を決してとらなかったであろうと思われる。

■それでは[redacted]高句麗が隋に負けないようにする為、日本は側面からどういう手助けをし

612年 ㊥4025P 3行　正月P 4021　こば 拒む 元824P　4.027P　ともあれ ㊥4028P 20行　㊥4159P

たのだろうか。

(1)それは、

〈日本が高句麗へ密かに、武器や兵を送るとともに、戦略をもたらした〉

からであったろうか。

(2)いやあるいは、そうとも解せようが、〈隋からの強い要請を断わって、日本が高句麗を攻めなかった〉

ということを指しているのかも知れない。

漠然とではあるが想像される。

■ ともあれ すなわち

〈聖徳太子は、隋の言い成り次第になるこのを拒んで、見「無礼」であるように外交政策も取れる対等な立場を貫き、隋の高句麗征討に手出しをされなかった〉

と考えてみたい。

■こうして、隋が倭国（日本国）の出方を窺っている間に、長い年月が経ってしまい、――裴世清が来朝した推古十六年（六〇八）から四年後の〈隋煬帝の第一回目の高句麗出兵は、なんと〉大業八年〈推古二十年〈六一二〉正月

のことであろうと推察される。

■では、大業八年（六一二）以後の隋の経緯について、手短かに。

■隋煬帝は、腹立たしくてならなかった。

「こんなにも、完膚無きまでに高句麗軍に惨敗して、大隋帝国の威信を保ち得ようか」

■煬帝は、何としてでも、皇帝の面目にかけて高句麗に勝たなければならないと思った。

■そこで、早くも翌年の大業九年（六一三）二月、再び高句麗遠征の大軍をおこした。

■またもや、あくなき徴発と労役が繰り返された。

■それは、群盗を急増させ、社会の不穏な空気をいよいよ険悪なものとした。

■しかも六月には、楊素（隋文帝代に権力を持った臣）の子であり、大臣の肩書さえ持つ楊玄感が、本国で反乱を起こした。

■楊玄感は、「戦役で疲れた民衆を救うため」と称して、楊玄感は謀反を企てたのだった。

■対高句麗戦の前戦に出ていた隋煬帝は、この反乱を鎮圧するために急遽軍を率いて引き返した。■しかし追いすがる高句麗軍の防ぎながらの撤退では、莫大な軍需物資も放棄して立ち去らねばならなかった。■ともかく、第二次高句麗遠征もま

た挫折した。

■なお、楊玄感は、蜂起したものの洛陽掠奪に失敗し、我に舞い戻ってきた高句麗遠征軍に打ち破られ、こうして騒乱は二ヶ月間で鎮定された。

■楊玄感はとらえられ、屍が洛陽にさらされた。

■またその一味とされた三万余が、一家みな殺しの極刑に処された。

■しかしこの乱によって多数の武器が民間へ流れ、[illegible]動乱の気運に油をそそぐこととなった。

■各地に人民の倒隋反乱がおこり、皇帝や王を称する者達がぞくぞくと出現した。

■そしてこれらの争乱は、ますます拡大し、手もつけられない状態になっていった。

■一方、楊玄感の謀反が隋煬帝に与えた衝撃は、あまりにも大きかった。煬帝は、いっきに自暴自棄となった。

■眠られぬ夜が多くなり、夜半にものの怪に襲われてとび起きることもあった。また、夜毎体をさすらせないと寝付けなくなった。

4,030P−1/2 煙の祭

挫折 4029P 1行
不穏 4028P 10行

ふくしゅう元1928P

■かつて、冷酷残虐に殺した者達の顔が、復讐をねらう亡霊のように、次々と現われ、心の隅にまとわりついて離れないのだった。

■「皇帝として快楽をきわめてきた自分のこの地位はいつまで持ち堪えられる続くのだろうか」

■その危惧は、二度もつづいた高句麗遠征の挫折や、国内情勢の悪化によって、揺き立てられていった。

■とはいえ、不安な皇帝は、皇帝なるがゆえに、その不安を外に見せるわけにゆかなかった。

感

■いや、逆に、より一層の権威を示さねばならなかった。無理と気づきながらも、あえて強がらねばならなかった。

■そしてこんなにも天下が騒然としている情況のなかで、三たび目の高句麗討伐を企図した。

隋煬帝は

■それが成功を収めるという確信はない。

■もしかしたら、無理は事態をさらに悪化させてゆくかも知れない。

■しかしながら、煬帝は、権威をとりつくろ

㊏4025P ～618年 広新 2292P　小林末の100P 大業は12年(617年)迄 古代朝鮮189P　4,030P－2/2　えいよう㊏3776P－2/2 嬰陽王㊏3876P　もっとも㊏4029P 25行　煬帝の死㊏4156P 618年　→S63.4.16(土) H9.1.10(金)

H17.5.14～「小林末」のチェックを行なう
428.12.8
H30(2018) 10.11(木)～10.14(日)(4回)
H31(2019) 4.5(金)～4.6(3回)
令和元(2019) 9.15(日)～9.16(3回)
令和2(2020) 5.3(日)～5.5(4回)
令和3(2021) 2.24(水)～3.1(4回)

3/1 下 2/27 2/27

うためにも、「来年(六一四)こそ、高句麗を討つ」と表明せずにおれなかった。

■煬帝は、強引に、第三回目の高句麗出兵を断行した。しかし高句麗もまた、連年の大戦争で疲労困憊していた。そこで嬰陽王は煬帝の要求を形式的に受け入れ、和議が成立した。

こうして双方の間に

■とはいえその後、和議の内容である「王みづから隋に朝貢する」という条項を高句麗が守らなかった。

■そこで煬帝は、六一七年、第四次高句麗討伐計画をたてるが、もはやその実行は不可能なことだった。(「古代朝鮮」井上秀雄、日本放送出版協会、一八九頁参照)

コクヨ ケ-20 20×20